科目区分　大学院：特別支援教育専攻
授業科目　行動上の問題への対応

教育実践を省察する大学院授業の試み

特別支援教育講座　　長尾秀夫

Ⅰ．授業の目的・形態

この授業は大学院生が教育実践を行なっている事例を省察して、実践の質向上の一翼を担うことを広義の目的とした。したがって、受講に際して受講生が何らかの実践事例をもっていることを確認し、もし対象事例がない場合は他の受講生とペアを組んでいただくことを初回のガイダンスで説明した。また、この授業が前期授業から継続している部分があることも説明した。

授業の目的は、「発達障害のある児童生徒の問題行動について教育制度や関係資料から現状を知る。その上で、問題行動の成立の過程を分析し、ＩＣＦの視点で児童生徒の側面と支援者等の環境の側面について理解を深める。これらの理解に立って、支援の実践例から支援方法の立て方を身につける。」ことである。

また、初回ガイダンスではこの授業の内容として、①行動の ABC 分析とその応用、②実践における PDCA サイクルの活用、③行動の尺度分類と経過図の作成、④対象児の国際生活機能分類の活用、⑤その他の受講生のニーズに合わせた課題について展開することを説明し、受講生たちが行動上の問題について、今知っていること、授業で学びたいことをアンケート調査した。

Ⅱ．大学院生の受講姿勢

受講学生は初回ガイダンス時が 14 名、2 回目からは 10 名となった。これらの受講生は全員が支援事例をもっていたので、まずは各自の事例で授業内容を具体的に自分の問題として理解すること、そして、他の受講生の発表を聞いて他の事例についても理解することで学びを深める学習法の習得について述べた。

受講生は毎回全員出席し、熱心に受講し、自分の担当回は責任を持って発表した。発表に当たっては、各単元の初めに教員が考え方の基本を模式化したプリントを例示して説明をした後、次の週から受講生に発表を割り振った。受講生は要点をレポートにまとめて分かりやすく発表した。それぞれの発表に対する自発的な質問やコメントは少なく、特定の数名から意見が出ただけであった。

Ⅲ．教員の授業運営

授業の主な内容は、LD、ADHD、高機能自閉症を中心に発達障害のある児童生徒の行動上の問題への対応についてであった。行動上の問題の教育制度上の取り扱い、医学的対処、教育的取り組みを具体的事例を通して解説し、討論した。

授業スケジュールを下記する。

第 1 回：子どもの行動の記録；行動の客観的記述法（尺度分類法）を説明した

第 2～5 回:文部科学省の制度等資料の行動記録をみる；国立特別支援教育総合研究所の資料から行動特性の表現法を学んだ

第 6 回:発達障害児の医学的理解;DSM-Ⅳ－TR、ICD－１０、ICF を紹介した

第 7 回：発達障害児の医学的治療；発達障害児の行動に対する薬物療法を説明した

第 8 回：精神障害児の療育・教育を ICT を用いて紹介した（特別講師と共に）

第 9～11 回：事例を ICF で整理して理解し、指導計画に活かす；各自の事例を ICF で整理し、発表・討論する。そして指導計画に活かす方法を学んだ。

第 12、13 回：ICF で整理した事例の支援・教育の成果を尺度分類して表とグラフで示し、各自の担当事例の支援方法を発表・討論した

第 14 回:精神障害児の心理的ケアについて紹介した（特別講師が中心に）
第 15 回:授業内容を総括する問題で試験を行い、要点を解説した

Ⅳ．大学院生の授業評価とその考察

1）いわゆる授業評価

授業評価は通常の 5 段階（5 はそう思う、4 はややそう思う、3 はどちらともいえない、2 はあまりそう思わない、1 はそう思わない）で無記名により行った。1）教員の話し方はわかりやすかった？に対して、5 が 5 人、4 が 4 人、3 が 1 人であった。いつもの早口と話が飛ぶことが多かったのかもしれない。2）授業の構成・展開はよかった？に対して、5 が 2 人、4 が 4 人、3 が 3 人、2 が 1 人であった。途中で特別講師にも講義の一部を協力していただき、流れが中断したことがあった。3）授業の内容・レベルは自分にとって適当であった？に対して、5 が 4 人、4 が 4 人、3 が 2 人であった。4）この授業で新しい知識・概念・支援法が身についた？に対して、5 が 4 人、4 が 6 人で全員が授業の目的を達成していた。5）授業は教育支援に役立つ内容であった？に対して、5 が 4 人、4 が 6 人であった。6）教育媒体（スライド、ビデオ、ＤＶＤ）が有効に使われていた？に対して、5 が 3 人、4 が 3 人、3 が 3 人、2 が 1 人であった。授業は学生の報告が柱となっており、教員側からはプリントの配布やテキストが中心であった。事例カンファレンスが中心であるので、これらの媒体は必要性が低い。7）プリント等の教材が適当に使用されていた？に対して、5 が 3 人、４が 4 人、3 が 2 人であった。教員か受講生の資料は毎回あった。8）ノートやプリントに要点を書いて学習した？に対して、5 が 2 人、4 が 5 人、3 が 3 人であった。9）授業に積極的に参加（発表、質問、討論等）した？に対して、5 が 3 人、4 が 5 人、3 が 2 人であった。10）グループ討論は意見交換に有効であった？に対して、5 が 4 人、4 が 3 人、3 が 3 人であった。11）レポートは知識の整理に役立った？に対して、5 が 4 人、4 が 5 人、3 が 1 人であった。12）授業は自分にとって満足いくものであった？に対しても 5 が 4 人、4 が 5 人、2 が 1 人であった。

以上の結果から、ほぼ授業の到達目標は達成できた。1 人の 2 を記入した受講生は他の部分についても 2 を記入した受講生であった。この受講生の声を授業の中の様子からはキャッチできなかった。普通に授業に参加している受講生の中にもこのような評価をする人があることは、真摯に受け止めたい。

2）学生による DP と対応づけた授業評価

受講生の 4 段階評価（4　十分貢献した、3　貢献した、2　あまり貢献しなかった、1　無関係であった）を紹介する。DP1 の知識・理解の 1A と 1B は共に、4 が 4 人、3 が 6 人であった。DP2 の思考・判断の 2A と 2B は共に 4 が 5 人、3 が 5 人であった。DP3 の技能・表現の 3A は 4 が 4 人、3 が 6 人、3B は 4 が 3 人、3 が 7 人であった。DP4 の関心・意欲の 4A は 4 が 5 人、3 が 5 人、4B は 4 が 4 人、3 が 6 人であった。DP5 の態度の 5A は 4 が 6 人、3 が 4 人、5B は 4 が 5 人、3 が 5 人であった。

この講義が教育実践力の向上を目指したものであったので、DP と共通する授業内容であった。受講生の評価が実践力向上に貢献したとの評価となり、一安心である。

Ⅴ．受講環境、施設・設備

耐震改修のために教室を研究室に移して行なった。やや狭い印象もあったが、受講生の人数からはほぼ適当なものであった。ただ、研究室の使用は施錠の問題があり、受講生の授業準備に迷惑をかけたこともあった。

照明や暖房も整い、静かで環境は整ったものであった。ICT 授業も通信状態は良好で、スムースに実施できた。